

令和2年白老町議会総務文教常任委員会会議録

令和2年1月22日（水曜日）

開 会 午前10時00分

閉 会 午前11時55分

○会議に付した事件

所管事務調査

1. スポーツ振興の現状と課題について

○出席委員（6名）

委員長	吉谷一孝君	副委員長	佐藤雄大君
委員	大淵紀夫君	委員	小西秀延君
委員	氏家裕治君	委員	前田博之君

○欠席委員（なし）

○説明のため出席した者の職氏名

企画課長	工藤智寿君
生涯学習課長	池田誠君
企画課主幹	喜尾盛頭君
生涯学習課主幹	川崎真也君
生涯学習課主査	葉廣照美君

○職務のため出席した事務局職員

事務局長	高橋裕明君
主査	小野寺修男君

◎開会の宣告

○委員長（吉谷一孝君） それでは、ただいまより総務文教常任委員会を開催いたします。

（午前10時00分）

○委員長（吉谷一孝君） 本日の所管事務調査はスポーツ振興の現状と課題について、本日は課題の整理を行いたいと思います。

1つ目、スポーツ振興計画（スポーツ都市宣言）と現状について、これを生涯学習課。2つ目、スポーツ振興のための施設整備及び参加や団体の課題について、こちらも生涯学習課より説明をいただきます。3点目、スポーツツーリズムの可能性について、こちらを企画課。スポーツツーリズムとは、道内におけるスポーツ合宿の状況、今後の取組みについて順次、説明を願います。

池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 私のほうから大きな1点目のスポーツ振興の計画と現状についてと、2点目のスポーツ振興のための施設整備及び参加や団体の課題についてのほうを説明させていただきます。事前にお配りさせていただきました所管事務調査の写真のついている資料の1ページのほうをごらんいただきたいと思います。

まず大きな1点目、スポーツ振興の計画（スポーツ都市宣言）と現状についてでございます。スポーツ都市宣言の意義、目的ということで、本町につきましては昭和30年代から40年代にかけて大昭和製紙（株）や（株）旭化成などの大きな工場の進出により人口が2万人を超えまして、町民がスポーツを通して豊かな心と健康な体づくりの目的のために、多種多様なスポーツに取り組み、多くのアスリートや競技団体が誕生し活躍してきております。特に大昭和製紙（株）さんは野球が主に盛んで旭化成さんにつきましては柔道や陸上、そういう部分に力を入れられていたかと思いません。そうした中におきまして、昭和49年に大昭和製紙北海道野球部が第45回都市対抗野球大会で初優勝しまして黒獅子旗が初めて津軽海峡を渡ったということは当時の方は、大いに盛り上がったところかと思えます。そういうこともありまして町民のスポーツに対する関心がさらに高まり、各種スポーツ施設の建設及びスポーツ都市宣言の機運が醸成されまして、昭和51年7月17日に道内では7番目となります、スポーツ都市宣言を宣言したところでございます。スポーツ都市宣言以降の本町におけますスポーツ競技に優秀な成績を収められている個人・団体は下記別表1のとおり多岐にわたっております。全国大会優勝者やオリンピックでのメダル獲得者を輩出するなどスポーツ都市を宣言した意義は非常に大きいものとなっております。別表1のほうですけれども、昭和51年度スポーツ都市宣言以降の中で町史から抜粋したものとなっております。私の母校であります日大高校、甲子園に4度出場しております。山本宏美さんがスケートで中学校から全道優勝を多数してございまして、平成6年のリレハンメルオリンピックスピードスケート女子5,000メートルで銅メダルを獲得しております。昭和57年には相撲なのですけれども、素人相撲というのが当時、何回か開催されまして団体が優勝しております。山田さんという方は個人戦でも準優勝されております。少年団でいきますと、ここにはないですけれども少年野球が全国大会に出場するという経過もありますし、ここ最近で言いますと白翔中学校が中体連の全国大会で優勝しまして、あとは北海道栄高校の駅伝部が

全国大会で活躍するといった経過がございます。

続きまして、2 ページです。スポーツ振興の現状と展望についてでございます。スポーツ都市を宣言した昭和50年代につきましては現生涯学習課ですけれど当時、社会教育課としてスポーツ係やスポーツ指導班等を配置しておりまして組織体制は非常に充実していたと思います。この体制の中でスポーツ教室・講演会、スポーツレクリエーション大会の開催、指導者・団体育成に努めてきております。しかしながら、平成に入りましてスポーツ業務は体育協会へ運営費及び事業費を補助し、施設管理にあたっては指定管理者制度を導入し、民間のノウハウを活用した運営にあっております。今後のスポーツ振興の展望につきましては、ご存知かと思いますが少子化ですとか人口減少などから従来どおりの事業展開では開催できない大会ですとか、イベントも見受けられている状況にあります。健康増進もしくは競技力向上につながる町民ニーズを明確にして、既存施設を有効に活用しながら、スポーツの場と機会を提供していきたいと展望としては考えてございます。

大きな2 点目です。スポーツ振興のための施設整備及び参加や団体の課題についてということの1 点目、スポーツ施設の現状と課題についてです。本町のスポーツ施設につきましては、昭和45年に総合体育館を整備して以降、下記の施設を整備したということで別表に主な体育施設を記載させていただいております。昭和45年に総合体育館を建設、柔剣道場は昭和53年となります。その後、町営野球場、町民温水プール、陸上競技場、はまなすスポーツセンター、桜ヶ丘テニスコートは勤労者体育施設という事業で整備しておりまして、途中で社会教育施設のほうに移管しております。ほかにもふれあい広場ですとか北吉原の運動広場ですとかありますが、ここの部分は町史に記載の部分の主なものを抜粋させていただいております。現状としましては、いずれの施設におきましても建設後、大規模な改修工事は行われていない状況でございます。いずれも30年以上が経過しており、総合体育館につきましては、ことし50年となります。特に財政健全化計画が始まった平成20年以降は修繕費用も圧縮された状況もあり今後、速やかな改修の必要があるとは考えておりますが、施設改修に充てる補助制度が少ないこと、また起債や一般財源を含めた財源確保が課題であると言えます。

1 点目のスポーツの参加や団体の現状と課題についてでございます。スポーツ施設における利用状況につきましては、後ほど別表3 をごらんいただきたいと思うのですが、平成21年の9 万2,785人から平成30年度は8 万997人と10年間で1 万1,788人の減となっております。4 ページに別表3 ございます。利用状況としては平成28年度より3 カ年でトレーニング機器を総合体育館で更新しましたが、総合体育館はこの表の一番左側にありますが利用者としては伸びてございます。はまなすスポーツセンターについては全天候型運動施設ということもあり利用者はほぼ横ばいな状況です。一方でプール、テニスコート、野球場及び陸上競技場の利用者は大きく減少しております。その要因としましては団体数の減少のほか、施設や設備の老朽化によりまして大会等の主催、開催を敬遠される傾向もあるかと考えております。また、スポーツ団体の現状につきましては、体育協会加盟団体が平成22年度は32団体、1,605人であったものが平成30年度には28団体、1,416人と4 団体、189人減少しております。スポーツ少年団にあっては平成22年度は15団体、341人から、平成30年度は7 団体、96名と8 団体、245人の減少となっております。こちらにつきましては、5 ページの別表4 のほうに社会教育団体の状況ということで、この表の中の一番上が体育協会の平成22年から30年

までの団体数、会員数、真ん中のスポーツ少年団本部という記載があると思いますが、こちらのほうが少年団の団体数、会員数となっております。近年につきましては、少子化によりまして少年団の会員数の減少が著しく、特に団体種目の野球やサッカー、バレーボール、バスケットボールというのが町内で一団体となっております。そのため、大会につきましては町外への大会に参加せざるを得ない現状となっております。また、子供やその保護者の町民のスポーツに取り組む考え方も変化しており現在、個人競技に向かう傾向も見受けられております。ちなみに白老中学校の部活動で一番大きい組織しているものはバドミントン部となっております。こうした現状の中、いかに従来までの白老で大きく成長してきたスポーツ、それを振興すべきか、あるいは現代のニーズに合った事業展開を進めていくかが課題と捉えてございます。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） それでは私のほうから、スポーツツーリズムの可能性についてということでご説明させていただきます。なお、詳細それから資料の説明につきましては喜尾主幹のほうから説明させていただきますので、よろしく願いいたします。

資料の6ページをお開きください。こちらに書いてありますとおり、スポーツツーリズムとはという定義でございまして、スポーツを観戦、楽しむ、そういった移動だけではなくて周辺の観光要素やスポーツを支える人々の交流や地域連携も付加した旅行スタイルということでございます。真ん中あたりに絵で示しておりますが、経済効果ですとか国際大会の誘致、人々の交流地域発信、社会的効果、環境整備のまちづくり、周辺観光といったさまざまな分野に広くわたっていくというものでございます。

日本におけるスポーツツーリズムの推進の流れでございます。2010年1月に政府の観光立国推進本部で初めて取り上げられまして、その後同年5月に「スポーツツーリズム推進連絡会議」が設置され、翌月には推進基本方針が策定されてございます。また、2012年3月には「観光立国推進基本計画」、「スポーツ基本計画」内で位置づけられ、その流れをくみまして2015年スポーツ庁が設置されているところでございます。2017年3月にはスポーツ庁「第2期スポーツ基本計画」においてスポーツを通じた地域活性化の具体的施策として「スポーツツーリズム」が盛り込まれているような状況でございます。翌年3月になりますが、「スポーツツーリズム需要拡大戦略」の策定や、同年6月未来投資戦略208において、観光・スポーツ・文化芸術分野におけるKPIとして、スポーツ市場規模を2015年の5.5兆円から2020年まで10兆円、さらには2025年までには15兆円に拡大するとされたところでございます。2019年3月にはスポーツツーリズムの推進に向けたアクションプログラム2019が策定され、5月には「北海道スポーツ関連産業創出プラン」が策定されたところでございます。

次ページでございます。先ほど、市場規模のお話もさせていただきました。世界的な市場規模は、2016年で世界トータル1兆4,100億米ドルということで示されておりますが、2021年予測としましては5年間で約4.05倍の5兆7,200億米ドルということで英国の調査会社には、そういう推計がなされているところでございます。日本においては2021年3,800億円と2015年度比72.4%増の数値目標を掲げてございます。なお、こちらにも記載しておりますが参考としましては、ラグビーワールドカップ昨年行われましたが、大会前の分析では経済効果が4,372億円ということで経済効果が分

析として出ていたということでございます。

(2)、北海道内におけるスポーツ合宿等の状況についての結果でございます。2018年度の実績調査の結果でございます。詳細につきましては①の市町村別のベスト5、それから競技別のベスト5につきましては後ほど詳細な説明をさせていただきますので説明を省略させていただきます。

(3)、今後の取り組みですが、スポーツツーリズムの推進は町長公約にもございますが、本町の立地や気候、それから本州でよく言われている特にスポーツ少年団とかで夏休み期間中が非常に暑くて、子供たちが大会の実施などを非常に三十数度の中でやるのはどうだということで大大会が中止、もしくは延期それから他地域でやるというような流れが実はございます。そういった中で北海道においては涼やかな気候の中でやっていただくということも、これから大会誘致、北海道全体の中でも当然、議論されてくるのではないかなということもございます。また、それらにかかるスポーツ合宿、こういったことを積極的に進めてまいりたいと考えております。それと同時に健康の保持増進やレクリエーションを目的として、いつでも、誰でも、どこでも気軽にスポーツに参加できる「生涯スポーツ」を推進し、加えて多くの町民の健康保持増進を加え、毎日の生きがいに結びつけることができる社会の実現を図っていきたくと今考えているところでございます。資料の詳細につきましては、喜尾主幹から説明させます。

○委員長（吉谷一孝君） 喜尾企画課主幹。

○企画課主幹（喜尾盛頭君） 私のほうからは、資料につきまして簡単に説明させていただきたいと思っております。資料1から資料3まで概略を説明させていただければと考えてございます。

まず資料1につきまして、スポーツツーリズム推進基本方針ということで、2010年5月に観光庁で設置しましたスポーツツーリズム推進連絡会議が策定したものということになってございます。国としてスポーツツーリズムについて定めた最初の方針ということになってございます。こちらの内容につきましては、スポーツツーリズムに期待する効果としまして、スポーツの振興、加えて健康の増進、産業振興など幅広い分野に効果があるということでまとめられているものでございます。また、スポーツツーリズムの可能性について、幾つかの検証がなされておりますが当然、国内外共にターゲットということになります。主には海外ニーズを強く意識した中で今後、進めていきたいと思いますということで示された方針になっているものでございます。

次に資料2でございますが、資料2につきましてはスポーツツーリズムの推進に向けたアクションプログラム2019ということで、スポーツ庁のほうで作成された資料になってございます。こちらにつきましては、先の2018年に策定されましたスポーツツーリズム需要拡大戦略におきまして、地域の意識啓発及びコンテンツ開発・受入体制強化、2番目に国・企業。地域・団体等の連携強化、3番目に官民連携プロモーションの3本の柱で施策を推進していくこととされたことを受けて2019年に策定されたものでございます。拡大戦略の中では2018年以降の重要なテーマとしましてはアウトドアスポーツツーリズムと武道ツーリズムということで設定されまして、2018年はプロモーションを重点的に行われてきているものです。2019年度以降につきましては、一つは体験型コンテンツを提供し、リピーターの獲得を目指そうというものと、もう一つ、スポーツツーリズムを推進するにあたって地域で人材が不足している状況があるということで手引きの作成、また各地域でセミナーを開催しますということになっておりまして、今のところ2020年2月には札幌でセミナーが開催

される予定ということになっているものでございます。

次に資料3でございます。こちらにつきましては、北海道スポーツ関連産業創出プランということでございます。こちら、未来都市戦略2018、こちら安倍内閣における成長戦略を書いたものなのですが、こちらを受けまして北海道経済産業局が2019年5月に策定したものであるということになってございまして、北海道における地域の稼ぐ力の向上を図るといような内容になってございまして、スポーツの産業化、交流人口の獲得に向け経済産業局が取り組むべき分野のアクションプランを横断的に検討するために実施した調査結果を受けまして、プランとしてまとめたものでございまして、プランの柱としましては一つがプロスポーツチームとの連携。二つ目が魅せるスポーツへということとエンタメ産業との融合。また3番目としましては活力あふれるビンテージ・ソサイエティに貢献する健康寿命延伸産業との融合ということで、ビンテージ・ソサイエティというものは高齢者が社会の負担となるものではなくて、社会の力となる社会を目指そうというものでございます。そして、もう一つが戦略的なイベント連携、また合宿誘致等による賑わい創出というものがアクションプランの中身でございます。

続きまして、資料4につきまして若干、詳細を説明させていただければと思っております。こちらは北海道のほうで調査しました北海道スポーツ合宿実態調査ということでございまして、平成30年度の実績をまとめたものになってございます。179市町村のうち178の市町村が回答している内容というものです。一つめくっていただきますと、2、スポーツ合宿の実施市町村数ということで表1という記載がございますが、こちらにつきましては近年ですと平成23年度から28年度までは減少傾向にありましたが、29年、30年ということでは増加に転じているというものでございます。管内としましては、渡島管内では全市町村が実施しているということで、胆振につきましては11市町村のうち9ということで豊浦町と登別市が報告に入っていないようでございまして、実際あったかかないかが把握できていないのか、そこははっきりとはわからないのですが、そういう状況でございます。

次のページです。3、スポーツ合宿の実施件数及び参加実人数ということでございまして、平成30年で見ますと道内、道外不明と33万8,494人の参加延人数があったというものでございますが、こちら中身を見てもみますと、実際の参加実人数としましては道内、道外比見ますと道内が道外の4.4倍ということになっておりますが、参加延人数自体は道内が道外の約1.45倍ということで縮まっているという中で道外の参加者の平均参加日数を割り返してみますと8.57日ということで1週間以上の滞在が多いということです。道内の参加者数の日数の平均としては2.83日ということで3日程度の合宿が多いのかなということを押さえてございまして、道外からいらっしゃる方は長期間の合宿をやっている状況が見て取れるということでございます。

次のページになります。4、スポーツ合宿の地域別実施状況ということでございます。こちらにつきましては、管内としましては一番多いのはオホーツク管内、二番目が上川管内、次に空知ということになってございまして、一番のオホーツクが特徴的なのは道外からの参加者が多いということになってございまして、空港も近くにあるということでアクセスもいいことも影響していると考えてございます。

次に5番目、スポーツ合宿の団体別実施状況ということでございまして、こちら圏域別、振興局

管内別ということの取りまとめでございますが、団体としましては高校生の合宿の実施状況が多いということと、その次がその他、次に大学生が多いということで、高校生、その他につきましては道内からの参加が多いのですが、大学生はほぼ道外から来ている状況があります。

次に6のスポーツ合宿の市町村別実施状況、また7のスポーツ合宿の競技別実施状況につきましては先ほどの資料の7ページのほうに取りまとめをさせていただいてはいるのですが、市町村別で見ますと参加延人数が多いのが1位が士別市、2位が北見市、3位が深川市、4位が美瑛町、5位が網走市ということになっております。1位の士別市につきましては陸上長距離のプロ企業のチームが多く参加しております。次に2番目の北見市につきましては、ラグビーの大学生またプロ企業のチームが多く参加されている状況があります。3番目の深川市につきましては、こちらも陸上の長距離ということで社会人また大学の合宿の状況が多いということと、美瑛町につきましては冬場のスキーのクロスカントリーの参加者が多いということで、こちらその他または大学の参加が多いということでございます。次に5番目の網走市につきましては、こちらもラグビーということでオホーツク管内につきましてはラグビーの合宿の状況が多いというものでございます。

次に②としまして、まとめましたのが競技別のベスト5ということですが、先ほどの市町村別では特段トップには出てこなかったのですが、最も多いのが野球・ソフトボールということになっておりまして、野球・ソフトボール一番多い市町としましては、知内町が一番多くなっております。次にサッカーにつきましては2番目になっておりますが、一番多いのが日高町になっております。次に陸上長距離につきましては上に出てきている士別市、網走市が多いと、4番目のラグビーにつきましては北見市、網走市が多い、5番目のバスケットボールにつきましては長万部町、稚内市が多いということになっていまして、野球とソフトボールにつきましては道内、万遍なく広くどこが抜きん出ているというわけではなくて、参加している状況があるというものでございます。

資料の説明につきましては以上になります。

○委員長（吉谷一孝君） 資料の説明ありがとうございました。

それではスポーツ振興計画、スポーツ都市宣言の現状についてということで、今の資料の説明も含めて何かご意見、ご質問ある方いらっしゃいましたら挙手にてお願いいたします。

小西委員。

○委員（小西秀延君） 資料の3ページ、少子化で少年団の会員数が著しく減っているということで、少年団で団体競技、野球、サッカーは私たちの子供の頃で言えば一番盛んだったのかなという気がしていますけれども、それが一団体になってしまっているということで、これは課が違って学校教育のほうになるかもしれませんが、中学校とかでも野球が今、ひとチームになっているのか。それも存続も危ういということで聞いていますし、サッカーはもう町内で無くなっているのではないかと聞いているのですが、その辺はどのように押さえられていますか。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 委員おっしゃるとおり、学校教育の分野にはなるのですけれども、サッカーはすでに中学校では部活は存在していません。主に少年団でサッカーをやっている子が苦小牧のクラブですとかそちらのほうに向かっているような現状にあるかと思えます。野球につきましては、白老中学校と白翔中学校とさらに町外の中学校と連合チームになって秋に確かやったか

などと思います。白老中学校の部員数も1名で白翔中学校も部員数がかなり減ってきているので次年度、合同でも部活が成り立つか成り立たないかという情報までは把握しております。当然、我々小さい頃の話をして大変申し訳ないのですけれども、野球でいうと町内で15チームから16チーム、社台から虎杖浜まで万遍なくありまして、町内主催の大会というのがたくさんありました。今、町内主催の各競技につきましては、ほとんどないという状態で、野球でいうと全国大会に行く全道、全国少年野球大会が苫小牧支部予選の中で一緒になったりですとか、管内の支部の中での大会に直接出場をしているような現状になっているかと思えます。

○委員長（吉谷一孝君） 小西委員。

○委員（小西秀延君） スポーツ振興ということで考えれば、子供の頃から中学、高校と続けていって大人になってもその競技を続けているという方が結構多いと思うのですけれども。振興ということで考えると小さい頃からのスポーツ振興ということで考えていかないと、なかなか幅が広がっていかないのではないかなと考えている一人なのです。生涯学習課も学校教育課と連携をとって団体競技ということも教育としても大変重要な部分をもっていると思うので、連携した中で学校のスポーツの振興というのももう少し幅を広げていけないものかなと考えているのですが、その辺はどうでしょうか。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 従来までは、どちらかというと学校現場は学校現場、少年団とか団体は団体という連携するというよりは、組織団体その学校現場というものの運営を大事に進めてきたところかなと思っております。ただ十年来、見てくると特に団体競技にかかわるスポーツもそうですけど、かつ文化系、スポーツ系となると全ての子供たちが運動のクラブ活動に入るとも限らないので、その数も減少していくと少なからず子供の出生数が100人切っていて、60人だと言っている中でスポーツの小さいときのスタート地点でも課題が出てくるのかなと。学校教育課とも課題は共有しているところなので、これからどういうふうに進めればいいのかというのは順次、考えていこうかと思っております。

○委員長（吉谷一孝君） 小西委員。

○委員（小西秀延君） ぜひ、学校現場からのスポーツ振興またスポーツ教育、そういうものを子供たちが多くの中から選べるような体制を学校教育課そして生涯学習課も含めて、白老の子供たちの幅を残してあげていただきたいと思っておりますので、その辺を切にお願いをさせていただきたいと思っております。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 1点だけ加えさせていただきますと、小学校の教育過程というのがどちらかというと学力ですとか英語だとかそういう部分がクローズアップされているのですけれども、一方で体力づくりというところの部分も課題としては全国の体力づくり調査だとか結果が出てきていますので、その駒の中でどうしていくかという考え方が一つと、学校に向けても団体向けの競技をどう維持していくのだという促し方も一つだと思いますので、我々としては子供たちの活動の学校教育課の現場以外の部分の活動で、どのように子供たちがスポーツにふれる機会だとかを提供できるのかということころは、学校教育課とは一緒には考えますけれども生涯学習課は生涯学習課

として別の視点でも考えていかなければだめだというのは加えさせていただきたいと思います。

○委員長（吉谷一孝君） そのほか、意見ありますか。

私のほうから、一つ質問させていただきたいと思います。

体育協会へ運営事業に対し補助金を出して、施設の指定管理制度を行ってきておりますが、現状ではそれについての課題等あると考えているかどうか、その辺についてお伺いしたいのですけれども。

池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） まず一つには、体育協会に事業費と運営費ということで人件費と事業費、補助金を出しております。流れる的には財団法人を設立したときに、ある程度の我々が教育行政のほうで担ってきたスポーツという管理運営と事業の企画運営というのは基本的には全て体育協会のほうに委託をお願いしているような流れです。当初は団体数もそれなりにありまして、施設もおおむね良好に活用していただき大会もいろいろできたのかと思います。ただ、今ずっとおっしゃっているとおり競技の参加数も団体数も減り、これは大人も徐々に徐々に減ってきている部分もあるのですけれど、子供は少子化の影響でどんどん組織数、団体数が減ってきております。その中で、いただいている補助金を従来どおりの目的で使うという部分ではなくて、ニーズニーズで書かせていただいていた部分は、まずは特に少年団の部分の活動でどのような課題があって、どういうニーズがあるのだということを、この一年、二年は確認して今までの取り組みではない、人材を育成するのか子供が集まりやすい取り組みにするのか、まずは体を動かすことが必要なのかという部分を補助金を出している以上は内容を精査して進めていただきたいということで課題としては団体数とか子供たちが減ってきた中で、どのように施設を活用していただくのかが一つと。もう一つは子供たちに体を動かしてもらう機会を体育協会として主体として考えていただきたいということで、その課題について今取り組んでいただいているところかと思っております。

○委員長（吉谷一孝君） その件なのですけれど、両方にまたがってくるかと思うのですが、子供とスポーツだけではなく、私が今考えるのは子供と親とその競技に参加する、ここまで考えていかないと、なかなか競技に行く、もっと言うと小学生の頃からであれば送って行く、迎えに行くという親の負担とかも考えて課題の抽出をしていかないと、なかなか難しくなっている現状があるのかと思っております。今、話にもありましたように萩野と白老が一緒になるとかということを考えてみると、その辺の部分も一緒に考えながら、そして任せているのでやってもらう、課題も抽出してもらってやるということではなく、行政と体育協会と一緒のテーブルについて課題解決について協議をして進めていくという方法を充実してやる必要があると考えているのですが、その辺についていかがですか。

池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 委員長ご指摘のとおりかと思うのです。子供の活動だけではなく、その活動に親御さんの協力が必要になってくる現状がふえてきているかと思っております。当然、各地域でやっていた団体スポーツがまちの中で一つになると、拠点のあるところに送り迎えだとかという部分は出てきています。そこが一つの課題だとは認識しております。従来の中でいきますと、徐々に徐々にというよりはぎりぎりまで団体が活動していて、この数年で急にぱたぱたと競技がで

きなくなっている団体、特に野球はそうなのかもしれないですけど。そういう部分につきましては、現状の把握ですとか状態はなかなかわかってはいるんですけど、それに対してどのように課題をうって行くのかというのは去年までの動きの中では、なかなか本格的な議論にはなっていなかったと思います。実際に競技団体の数ですとか、そういう部分がどんどんどんどん減ってきている状況にありますので、そこは議会の質問の中でも送り迎えの課題がありますだとかという課題提起はさせていただいていますので、それはどのように解決していこうかということが、これから取り組まなければならない課題だということで実際には押さえさせていただいております。

○委員長（吉谷一孝君） わりました。

そのほか、何かご質問のある方いらっしゃいますか。

大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） 今の話を聞いていて、実態としてはわかります。行政として実態の把握がどれぐらい正確にされているのかということが1点。実態の把握がどれぐらい正確に行われているかと。今、課長からもあったけれど、従来の考え方ではなくて企画、運営含めて新しい状況に合った行政の指導方針というのが必要ではないのかと思うのだ。当然、人口も減っている子供たちも減っている、そういう中で従来のやり方でやってもいけない、はっきりしているのです。ということは今、子供たちの話はあったけれども高齢者なら高齢者にもスポットをきちんと当ててやらないと、そういう状況ではないのではないかなのかなという気がするのだ。従来の考え方で企画、運営を任せてもそれは単なる補助金をそこに入れているだけの話なのです。議会ですから。ですから、そういうふうに考えたらスポーツ振興審議会が昔はあった。そういうところで、きちんと白老の実態に合った形のスポーツの行政や方針、今後の生かし方、いくら固執してもニーズは団体競技から個人競技になっているのだと思う。見たらわかるように、なぜ北見市がラグビー多いかといったら、北見北斗高校があったからでしょう。はっきりしているのだ。そういう実態をきちんとつかまえて、単なるスポーツツーリズムでも、そういうことがきちんと数字の中に反映していると思うのです。そういうことが、きちんと押さえられてやらないと一般論で例えばスポーツツーリズムなんていくらやったら、それはある意味事業として考えるわけでしょう。スポーツ振興と同時に。そうだとしたら、町の実態が把握されていなかったら、町民がそこをどう考えているかということ私はとても大切だと。今の段階では一つステップアップした行政の方向づけみたいなものが、スポーツ振興審議会なら審議会で学識経験者も入って、きちんと議論されないとだめだと、次の段階にいくところにきているのではないかと思うのだ。今の説明聞いて、すごくそう感じたのです。そこら辺どうですか。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） まず1点目の現状把握をどこまでできているのだという部分でいきますと申し訳ないのですが多分、団体数と人数の把握までしかできていないと思います。それでいいのかという部分でいくと、少し前ぐらいまでは今の団体が団体の中できちんと課題を洗い出して、どういうふうに競技、競技を振興させていくのかというのはどちらかというと現場対応をお願いしていたところですが、ただ、今そうやっていてもこういう状態にはなっているので、2点目の従来型ではなくという部分については、我々の課の中ではそういう方向に向かっていこうかと思って

はおります。それに対して体育協会に事業も運営費も補助しているので、その部分はお互いにもう少し体育協会が思っている現状と課題と行政側が思っている現状と課題とは現場と計画を立てる立場とすれ違いはここまでも若干はあったかと感じていますので、そこを少しずつでも密にしている状態なので、今後はどういうふうに今までのニーズの取り方というのは現場、現場のニーズの取り方だったので、これからもう少しさらにニーズがどういう部分になるのかと、我々もこのままではだめだなというところを共有した中で対策を打っていかねばだめかとは思っています。それに対して、スポーツ振興審議会というのは組織としてはないです。体育協会の中の審議会組織はありますけれど、大淵委員が言っているのは行政内部ですよね。中では今、社会教育委員会が全ての事項をみんなの基金の関係だとか文部科学省、スポーツの関係だとか全部受け持っている形で、これは財政の健全化の中で審議会だとかの統合という部分もあるので、ただ我々が課題に思っているのは生涯学習のみならず、ほか全体でもそうかもしれないのですけれど、その委員さんが全てのお品書きのある課題に対して一つ一つうまく審議できるのかどうなのかというのは、ここでいう課題ではないのですけれども、そこをきちんと我々が丁寧に押さえた中で説明していかないと、なかなか前には進んでいかないかと思えます。子供たちの話ばかりではなくて、最後の3点目でも高齢者にもというふうな部分の話もあったのですけれども、我々も今までのスポーツは体育館だとか体育施設を使ったスポーツ振興というよりも、どちらかという地域の子供もお年寄りの人も体を動かして元気であるところが、町長の3期目の公約の中にも入ってきておりますので、ここは競技力だけではなくて健康で医療費をかからないというそういう部分の対応になるような取り組みをしていかないと現場としては感じています。

○委員長（吉谷一孝君） 大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） 今の言われたことでいいのですけれど。ただ、私が言うのはスポーツというところで取り上げた場合は十把一からげでやるわけには私はいかないと思っているのだ。だから、今の人口動態や将来方向を含めたことの中で体育協会をどうしていくのか、この後もちろん組織論もあるのだろうけれど、町に合った形にしないとだめでしょう。従来の延長線上ではもういいのです。そのところを理論的にきちんとするためには、どうするかといったら、やっぱりその部分での振興審議会なら振興審議会がきちんとした方向を高齢者中心の、もう50%になっているわけだから。子供を無視するのではないよ。子供は大切な。だけど、そういうことを視野に入れた体育協会であればなめなの。今の体育協会は違うもの。だから、そういうことの方針を行政がきちんと出すということも今、私は大切な部分だろうと思うのです。それをしないと乗り遅れてしまって今までと同じに、とにかく人を集めて野球のチームを一つつくろうとか、そういうレベルではないのではないか。そこら辺を、もう少し深刻に例えば担当課なら担当課が受けとめて、それをどう白老の状況に合った形でのスポーツ振興を図るのかという方向づけを迫られているような気がするのだ。ただ見ていると、従来の延長線上でずるずるもの考え方のように見えてしまう。その頭の切りかえをしないとだめなのではないかというのが私の意見なのです。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 言われていることは、ここで個人的な見解を言うのはいかがかなとは思いますが。確かにそのとおりだと思います。この職場の経験が長いというものもあるのか

もしれないのですけれど、そもそもさかのぼって白老で何がよかったかといったらみんな元気だったのです。小さい頃は何が起爆で何が一丁目一番地にあったかという、みんなこれは否定はしないと思うのですけれど、大昭和製紙が野球が強くて皆んなで都市対抗に応援に行って帰ってきて、優勝して帰ってきた、準優勝だ、3位だとか、その流れでほかのスポーツ団体さんも皆さんそういう大会に出てよくやったという雰囲気があったと思うのです。それをどこかでという期待があるので、この今の現在の形をスポーツの競技力を強化していきたいという思いがずっと引きずって、白翔中学校が中体連で全国優勝したときも素晴らしいと思っていましたけれど。ただそれは上辺だけで今の部分を考えていくと我々の体育施設の現状どうなっているのと、団体の現状どうなっているのというところで、そこを目の前に見た場合に施設の状況もごらんになっていただいているので、これから課題になってくるのは建物をどうするのか。建物をどうするかといったら建物に付随する競技だとか愛好している方がどのくらいいるだとか、その分析を行わないで何かをしたいと言ってもなかなか町民もそうだし、皆さんもオーケーを出さないと思うし、特に我々もそうだと思いますので。ただ、それはどういうふうになってきた経過かという、やはり財政問題がずっと長く続いてきている部分で、やりたかったのがやれなくて、もうここまできたらこの先早くしないと何か壊れるというのが目白押しになっていますので、その部分は我々だけではなくて体育協会も指定管理している管理者もそうですし、まして行政サイドの部分とも公共施設の整備管理計画を立てる部署ともいろいろと情報、根拠を拾いながら今の現状としては現状の数字を押さえています、これは危ないですよという状態しかないのです。この先どうしなければならないのだという計画、政策的なことを積み上げていかないと、なかなか次のステップにいかないと思うので、今まさに入り口に遅いのですけれど入らないとだめだよという現状を認識しつつ、課題としては押さえています。

○委員長（吉谷一孝君） 1と2ということでは分けてはきたのですが、中身がどうしても参加や団体ということになってきていますのでリンクしている、1と2を合わせて話を進めていきたいと思うのですが。1について、ほかに何かご意見あれば、2にも引き続き合わせて施設整備等についての今、課長からお話ありましたようにその点について意見のある方いらっしゃいますか。

前田委員。

○委員（前田博之君） 今の大淵委員も、重なる部分あるかもしれませんが、きょうはスポーツの振興と現状と課題です。これは現状と課題が何があるから、どうだということになってくる。池田課長も前に教育委員会にいたのだけれども本来、教育行政として社会教育課として社会教育事業、行政があるべきかといったらないです。それにはスポーツ、文化、生涯教育、地域スポーツと入ってくるのだけれども、これらが教育行政として本来、法律もある社会教育事業の中で何をしたいのか正直見えないでし。きょう、そういうものが出るのかと思ったら出ない。そこで議論されても、行政は何を目指してしてるのかということがわからない中で議論したって、ただチェックするだけなのです。私は一つ聞きたいのは、本来の社会教育事業、行政にどうシフトするのかという部分が一番大事だと思うのです。それによって、先ほど大淵委員も話したような部分の展開になってくるのです。極端な話をすると団体競技、スポーツ振興、体育協会に任せています。各地域に任せています。そうではなくて、母体となるものがなければ振興は深まらないのです。細かいことだけ

れど、現場として今、苫小牧もそうだけれど親の労働環境が変わってみんな共働きで、もう親はあてにならないのです。あれだけ盛んなアイスホッケーだって、もう少年アイスホッケー団になってしまって学校ではできなくなって、そういう現状を分析した上で今、白老町のスポーツ行政どうあるべきかということを整理していかないと、私はもっと大きな捉え方がないと同じ議論をされても、結果的に個別のスポットだけにあたってしまって、前に進んでいかないと思うのですけれども大きな部分として、その辺だけお聞きしておきたいと思います。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 前田委員から何回か似たようなご指摘あったのかと。考え方は私も同じなのですが、当時スポーツが隆盛になってその流れがそのままいいのであれば、個別の運営だとかそういう部分はお任せしてもいいのかと思います。現状と課題がめまぐるしく変わっていく中で今、前田委員もおっしゃったとおり芸術文化もそうですけれど、スポーツも行政職員が中枢にいないで業務が外側に出ているということは課題には考えています。ただ、それが今まで行革で動いたのか結果そういうふうに動いたのかわかりませんが、その時代としてはよかったかもしれません。ただ、今としては行政側が現状と課題を押し返すために、大淵委員も前田委員も言っている生涯学習として芸術文化、スポーツそれら全てをどういう一丁目一番地に押し返して、その一丁目一番地というのは何かという部分は言われなくてもは理解はしているつもりなのですが、そこをスタートさせたいと思うのですけれども、それはいち担当課の部分ではなくて行政の大きな部分に私も提起しながら進めていかないとはいえないと思います。要は我々のところで予算も考え方も計画もきちんとして物事を進めていかないと、おそらく我々が感じていることとか外の団体だとか指定管理している部分ですとか業務を委託している先が同じく思っていないで、こうやって動いていると。どんどんどんどん自分たちの対応が後回しになって、結果いいスポーツの振興だとか文化の振興だとかというのはできないとは思っております。課題としてはすごく重たくて我々、現状のスタッフだとかそういう部分だけでは課題解消できないと思います。今、こういう柱が必要だという部分は押さえておりますので、何とか我々の部分で実現可能できるような。まず入り口がこうですよということをお見せできるような形に持って行きたいなという気持ちを持っているということでお答えさせていただきたいと思います。

○委員長（吉谷一孝君） 川崎生涯学習課主幹は、今まで課長等々議会の意見を聞いた中で主幹が感じている部分など、対応しようと思っている部分等々あったらご意見をお伺いしたいと思うのですが、いかがですか。

川崎生涯学習課主幹。

○生涯学習課主幹（川崎 真也君） はじめての方もいらっしゃるかと思いますが、北海道教育委員会のほうから昨年度から入ってきていて社会教育主事として仕事をさせていただいています。私は何度か機会があるときにも町民の方にもお話ししたのですけれども、転勤してからよく言われた言葉がこんなまちに来てくれてありがとうと言われたのです。私はそれを聞いて、すごくショックを受けて、元々学校の教員だったので、いつも言われたのはこんな何もないまちだけれど人柄もいいし、人情もあるし、自然もいいから、このまちで頑張ってくれよとほかのまちでは言われたのに、ずいぶん私はそう言われてショックだったので。なぜそういうことを言うの

かと、この2年間ずっと考えてきていて、それは先ほど課長からも話があったのですけれども、昔と今の比較と今と将来の比較をして自分たちの昔はこんなにすごいろいろなことができたのに、今はこういうことができない。将来も人口が減るとかささまざまな経済が縮小するだとか、そういうことに対する町民の自信のなさみたいなものが、うちのまちってすごくいいまちだとみんな思っているのだけれども、きっとそういう言葉に出てきたのではないかと思っています。今、池田課長また安藤教育長と話しているのは生涯学習が何をすべきかといったら、人づくり、つながりづくり、地域づくりだと思うのです。ただ、スポーツを強くしましょう、スポーツを振興しましょうということではなくて、先ほど委員からもお話たくさんあったのですけれども、我々のまちがどういう方向に向かっていくのか、人口は減っていくと思うのですけれど、人のつながりは絶対になくしてはいけない。スポーツとか文化芸術でもさまざまな分野で人がつながるような施策をうっていかないと、ただ協議会をしましょう、スポーツレクリエーション大会をしましょうということではなくて、基盤になるしっかりとした柱を我々が見出さなければいけないのではないかと思っています。来年度、生涯学習課では社会教育委員さんと協力しながら中期計画のほうを導きだしていくのですけれども、今まで以上に町民を巻き込んでつながりをつくっていくような、そういう社会教育の施策を打てるような計画づくりもしていきたいと思っています。

○委員長（吉谷一孝君） 暫時休憩をしたいと思います。

休憩 午前11時00分

再開 午前11時10分

○委員長（吉谷一孝君） 休憩を閉じて会議を再開いたします。

その他、ご意見を伺いたいと思いますが委員いかがでしょうか。

氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 全体的な流れの中でお聞きしたいのですけれど、白老町の別表3の体育施設の利用状況などを見ますと、例えば総合体育館、はまなすスポーツセンター、町民温水プールなどはある程度の人数の利用、町民の健康意識が高いなという部分も、ここで見て取れるような気がするのです。ただし、テニスコートだとか野球場、それから陸上競技場、ここについては施設の老朽化等々が影響して、なかなかそこを活用してどうのこうのという話にはなっていないのではないのかという部分があるのかとったりもします。利用状況関係、それから町民の健康意識の高まりみたいなものが、ある程度は見て取れるのですけれども、白老町にいくつかのパークゴルフ場があります。はっきり言って、すごくにぎわっています。ましてや町内だけではなくて町外からも来られている方々がいらっしゃるということで、そういった面で見ると一概に子供たちのスポーツ環境については仕方ないと思うのだけれど、スポーツという全体の観点から見ると、まだまだスポーツに関心を持たれている高齢者の方々町民の方々がいらっしゃるということが私の中にはあるのです。何を言いたいかという、このスポーツというものをとおして、まちをどうしていくのか、まちづくりの中にスポーツというものをどういう視点でおくのかだとか、まちづくり全体の中でスポーツというものの位置づけをしっかりとっていくということが大事なような気がしてならないのです。健康増進、健康寿命の延伸、そして日本全国に広がっているそういったブームを白老町にしつ

かりと位置づける、白老町には地の利として温泉があります。この温泉の活用なども含めて、ことはウポポイが開設する、そういったこと全てのまちづくり全体の中にスポーツというものを、どういう位置づけで考えていくのか、それによって随分大きく変わってくるような気がするのです。例えば学校教育、それから生涯学習、企画そういう単位で考えるのではなくて、まちづくり全体の中でスポーツをどういう位置づけで考えるのか。ですから、スポーツと食と観光を結びつけたっていいわけです。そういう形の中で、自然があり地場の魅力である温泉がある、そういったものを全てスポーツとどう組み合わせしていくのかということ考えてときに、私はスポーツというものが大きな広がりて白老の魅力発信にもつながっていくし、白老のまちづくりに大きな貢献する一つのアイテムにもなってくるのかなと思ったりもするものですから、そういった観点での考え方。ですから、トップである町長のランドデザインの中にスポーツというものがどういう位置づけにされるのかということが決まれば、今何をしなければいけないのかということがだんだん見えてくるような気がするのです。生涯学習課がこう考えている、学校教育課ではこう考えている、企画課ではこう考えていますというものをある程度まとめて、そしてまちづくりの一環としてスポーツをどういう位置におくのかということを考えていくべきではないかと、ざっくりなのですけれども、ずっと話を聞いていてそのような感じがしました。それについて、考え方をお伺いしておきたいと思えます。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 今のお話本当に氏家委員がおっしゃるとおり、まさにそのとおりでありまして、先ほども若干説明させていただきましたが、スポーツツーリズムの考え方もここにだてくるのかということをございます。今、お話いただいたスポーツだけではなくて健康寿命の関係、人生100年時代と言われる中で、いかに健康で過ごしていくかという観点、それから子供からお年寄りまで町民皆さんがスポーツを通じて親しむ機会の創出を図るすとか、健康寿命それから観光や経済振興も含めて、まちづくりも含めて多岐にわたるスポーツという一つの切り口をもってしても多岐にわたる分野になってくるのかということをございます。おっしゃられたとおり各課ではなくて総合的に取り組んでいかなければならないという考えをございます。町長の公約につきましても、学び、広がるまちという分野の中でスポーツの振興を図っていききたいというようなお話もございます。そういった中で町民に目を向けた施策、政策をやっていく中で、まさにいろいろな分野に携わっていくので、これからももっとこういう部分で各課協力しながら進めてまいりたいと考えているところをございます。

○委員長（吉谷一孝君） 氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 考え方はわかりますし、きょうの説明の中でまた各委員さんのいろいろな質問の中で見えてきたこともたくさんあると思うのですけれども。私はいずれにしても、こういったスポーツと食、観光また地場の温泉などを活用した中で交流人口が白老町に例えば1時間でも1日でも多くとどまっていたきながら、そして白老町の大きな財源。これからの高齢化社会また少子化そういったものを支える大きな財源を生み出す一つの要素がここにあるような気がしてならないのです。今までの従来どおりの考え方でやっていくと、入ってきたお金ということは町民税だとか固定資産税、白老町のある財源しか頼るものがなくて、これからのさまざまな施策の展開には全

然足りないのになります。よく、町長は稼ぐ力、稼ぐ力と言いますが、稼ぐ力に没頭するのではなくて、白老町の魅力をどう生かしていくのかが後から財源となっていくような考え方が大事なのではないかと。稼ぐ、稼ぐでやってしまうとこれは行政のテリトリーの範囲外になってしまうのです。ただし、自分たちのまちを見つめて今何が必要なのかということに着手していく、そういった努力の結果、後からお金というのはついてくるような気がしてならないものですから。ですから、例えばスポーツならスポーツ、温泉は温泉、一つ一つを物事として考えるのではなくて、ある程度白老町の地の利の中で物事というのを考えてもらって、魅力発信の一つの考え方として持っていていただきたいと思っています。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 魅力の発信ということで、これは稼ぐということではなくて、それがきちんとついてくるということで話されたのかと思います。その中で6月14日には道内2箇所で開催される聖火リレーのセレブレーションがウポポイに決まりました。このことはオリンピックにより白老町を全世界に発信する絶好の機会と考えております。また、正式決定ではございませんが、パラリンピックの採火式があるとも聞いております。こちらについても、本町が選ばれるよう取り組んでまいります。このようなことから、本年においてはウポポイ施設の開設、オリンピックの開催など世界中の人々が目を向けるようなことが本町で行われます。この機会を逃すことなく本町魅力発信に取り組んでまいりたいと考えております。

○委員長（吉谷一孝君） それでは、1番、2番についてその他ご意見ございませんか。なければ、3番のスポーツツーリズムの可能性についてということで進めていきたいと思っております。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○委員長（吉谷一孝君） それでは、3番のスポーツツーリズムの可能性について、ご質問のある方。

佐藤副委員長。

○副委員長（佐藤雄大君） スポーツ合宿の団体別実施状況と競技別実施状況についてなのですが、胆振では数字が出ているのですが、現在の白老町の実施状況について伺いたいです。

○委員長（吉谷一孝君） 喜尾企画課主幹。

○企画課主幹（喜尾盛頭君） こちらの北海道スポーツ合宿実態調査概要の中にあります白老町の現状ということでございますが、この数字の中に入っている部分としましては白老町としては競技としてはバドミントンということと、参加延人数としては90人がこの調査に入っているもの、これが調査結果ということになってはいるのですが、企画課として独自で調査を町内の宿泊業者さんとかにもお話を聞いた中でいいますと、合宿の部分でいいますとスポーツだけではない部分もあるのですが、吹奏楽ですとか美術部が合宿できている部分ですとか、また苫小牧や室蘭で大会がある場合には竹浦地区の旅館等々に宿泊している状況も押さえております。表に出していない状況の中でも数字としてはあるということでは捉えているところでございます。

○委員長（吉谷一孝君） 佐藤副委員長。

○副委員長（佐藤雄大君） バドミントンについてなのですが、プロチームではなくて社会人、大学生、高校生との世代がやっているのかお聞きしたいです。

○委員長（吉谷一孝君） 喜尾企画課主幹。

○企画課主幹（喜尾盛頭君） 本調査の中でいいますと、参加している件数としては1件、団体区分としましては高校生ということで、参加実人数としては30人で3泊というようなことで延人数が90人ということになっているものでございます。

○委員長（吉谷一孝君） 佐藤副委員長。

○副委員長（佐藤雄大君） わかりました。ありがとうございます。今後、スポーツ合宿に力を入れていくのではないかと思います。網走市などの事例では20年から30年前くらいからラグビーのコートを整えて今、結局ラグビーが注目されて社会人だったり大学生チームがたくさん合宿されているということなのですけれども、白老では今後どの競技だったり、どの層をターゲットにしていくなのかお聞きしたいです。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 合宿誘致のあり方という部分で今、検討しておりまして、まずはどの競技ということではなくて交流人口を含めて関係人口をふやすために、まずは白老町の先ほどもお話しさせていただきましたが、魅力を発信するもしくは情報を提供していく、このようなことに努めて白老町の民間施設ですとか旅館、ホテルありますけれども、そういうところの情報発信をできればと考えておりますし、すでに合宿を実施されているチームですとか高校生、大学生、それからクラブチームとかさまざまありますけれども、そういったところにはもう活用されていて、かなり競技団体によっては周知されているという状況もありますので、そういったところにも広がっていくようなことも含めて検討していきたいというふうに考えております。どの競技とかどういふふうにとということではなくて、まず交流人口、関係人口ふやしていくために合宿をしていただけるような情報の発信の仕方をしていきたいというのがまず第一で考えているところでございます。

○委員長（吉谷一孝君） そのほか、ご質問ある方いらっしゃいますか。

大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） やっぱり、具体的にきちんと方向が出るようなこと、議会が取り上げるということはそこで議論を煮詰めていかなければならない場ですから、要するに具体的な議論ができる方向づけがないと、そこに対する意見というのは言えないのです、これからやりますよとか、頑張りますよというのは、どうぞ頑張ってくださいというふうにしか言えないわけでしょう。だけど、議会が政策的に関与するというのは、どういうことかという、そういうところに議会はこう考えるよということを言わないといけないわけです。そういうものの題材がないと議論にならないのだ。ただ聞いて、結果的には我々議会がまとめるときに、こういう意見を言いましたと、それで終わりです。議会の役割を何にも果たしてないのです。ここで議論ができるだけの具体的な中身や方向性がきちんと出ると、それが期限をきって出れば我々これから4年間ありますから、本当にこれが例えばスポーツツーリズムが本当に生きるのであれば、生きるような具体的な提案がないとだめなのです。4年間あるわけだから。そしたら、議会としてはこういう応援をするとか、財源をきちんとつけなさいとかということまで、ひょっとしたらいくかもしれないです。社会教育主事、5人と言わないけれど3人にすれとか。議会が認めて必要があれば。そういう議論ができる題材でないと、ここでただ話を聞いて、ああそうですかと終わったら何にもならないのです。そういう気持ちで議

会に臨むときは臨んでほしいし、取り上げたときはあと2カ月間ありますから、延ばすこともありますから、期限がきつてきちんとやれることをやると、それについて議会がきちんと議論するというような所管事務調査に私はしてほしいのです。結果的には何も残らないのです。ただ話を聞いただけ。施設を見ても。もっと言えば例えば、この施設は白老町にはふさわしくないからいらないと、これはもっとお金をかけてやるべきだと、というようなところまで議会が議論できるようなふうになっていかないと、今までと同じ延長線上でしかなくなるのだ。そこのところは企画も含めて肝に銘じてやってほしいのです。議会代表しているわけではないけれど、議会として議員として見たときに、そういう提起がない限り、ここからはそういう方向性は出せないから。やっぱり少なくとも総務文教常任委員会が取り上げるのだから。取り上げて、最後になつたらただ話しを聞いて終わりましたと、それでは何にも議会の意味がないから。そういう気持ちでいてほしいし、委員長にお願いしたいのは、ただ討論してそれで終わりではなくて議会はスポーツ行政について議会としてはこういうふうにと考えると。無理かもしれないけれど。そういうような常任委員会にしないとだめだと思いますので、その点だけはお願いをしておきます。

○委員長（吉谷一孝君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） 1項目め、2項目めの部分については我々、既存にある施設の現状と課題なので、ご理解いただこうと思って極力はあるのままのことを申し述べさせていただいています。ただ、最終的には委員会報告等々あると思いますので、次にご説明する段階については我々の今の立場でお示しできることは、大淵委員の言う中身の部分でいったら入り口になるのか中間まで組み込めるかわからないですけれど、少なからず1項目め、2項目め全体の部分もその施設のあり方をどうするのだかという課題が出てくると思いますので、可能であればそこに踏み込めるような内容をまた内部のほうで詰めていきたいと思います。

後段のスポーツツーリズムのほうの話については、私のほうは状況がわかりませんが、ただ過去に合宿誘致だとかそういう部分は体育協会でも森野が体験館として宿泊施設を兼ねて使うよといった時は一生懸命やっている経緯あります。氏家委員おっしゃったとおり今、体育施設がただスポーツだけで使うのではなくて健康づくりもありますし観光、ウポポイができたらいろいろな人がいらっしやいます。そのために、スポーツの大会を誘致するためには今の現状の施設、まず町民にきちんと使っていただかないとだめだということが一丁目一番地だと思うのですけれども。その空いたところをどういうふうに施設を活用していただけるのだということではないと、なかなか次の施設の改修だとか更新ですとか、さらに合宿を誘致します、この施設の数では足りない。となつたら次のステップがどうだという部分に踏み込められるような、我々の考え方としてはある程度煮詰めていきたいとは考えます。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 先ほど大淵委員からご指摘のある、具体的な話がないとまさにそのとおりなのですけれども。言い訳ではございませんけれども、スポーツツーリズムの考え方もここ数年で始まった中で、どういうふうに町の中で落とし込めるかということも含めて、それから池田課長が先ほど申しましたとおり本町の施設のあり方の部分も当然、含めた中でこれからまさに積み上げて具体的に何を展開していくのかということところが実はこれからのお話の部分もあって、本日の会

議のとおり現状と課題ということで今、まずは現状のお話をさせていただきました。課題がこういったところがあるよということと、スポーツツーリズムは今こういう状況で国の動きとしてはこういうところがあります、北海道の計画としてはこういうところがあります。では本町はどのように取り組んでいくかというところは、まさにこれから積み上げていくところもあったので、正直申し上げまして大変、心苦しいのですが本町の取り組みが、まだこうだよと決まったものがあって、具体的にはこういうことをやりたいと思うのですけれども委員の皆様いかがでしょうか、というのが本筋だとは思いますが、まだまだそこまで煮詰まっていない部分も正直ございます。そういった中で、きょうの会議も踏まえて言われたことは本当におっしゃるとおりだと思いますので、具体的なものが見えてきた段階でまた随時お話をさせていただく機会をいただければと感じているところでございます。

○委員長（吉谷一孝君） 大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） 今の話で結構ですけど、要するに課長会議か政策会議かありますよね。本当にそのことが必要だったら、優先順位をきちんとつけてそこで提起をして町全体の問題になる、これは町の起死回生になるのだというふうに本当に思ったら、少なくともそういう優先順位がつくくらいの議論ができるような中身にしてほしいのです。そしたら、あなたたちは必ずこちらへフィードバックしなければだめになる、そしたら我々も一緒にやれるわけです。議会と行政が車の両輪だという意味はそういう意味なのです。そこが議論されなかったら、いくらやっても表面的な議論で終わっているのです。私は、そういうものではなくて組み込まないと。先ほど、川崎主幹がすごくいいこと言いました。一番最初に来たとき、何て町民が思ったか。私は議会で言ったけれど、役場の職員はお金がないからできないと言ったら誰もみんなそういうふうにしかなわなくなるのだ。お金がないからできないという言葉は皆さん禁句です。そういうことを、きちんと課長会議なら課長会議で、そういう中できちんとまちの中で議論しないとだめです。そして、議会と対等にきちんとやっていくと、我々も応援するというような仕組みにしてほしいと、すごく思います。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 実は今、大淵委員言われたとおり最終的には経営会議ということで政策決定していく中で今まさに先ほど説明したこととかぶりますけれども、積み上げて今どういう形で具体的なものを出していけるかというところを、つくり込んでいる最中の部分も実はございます。最終的な判断の部分は当然、経営会議にかけた中で決定をし、その後に議員の皆様にお諮りをして、議論させていただくというような流れは決してぶれるものでも何ものでもないというふうに思っておりますので、そういう形で今後も進めていきたいと考えてございます。

○委員長（吉谷一孝君） そのほか、ご質問ありますか。

小西委員。

○委員（小西秀延君） まだ具体化されていないというところをは今、議論の中で把握をさせていただきました。ただ、進む方向性として国もこういうことでスポーツツーリズムの推進をしています、北海道もスポーツ関連産業創出プランという中で動いております。その中でまた各自自治体、参考例としていくつかのところも載っておりますが、スポーツ合宿の件数としては野球やソフトボールとかバスケットボールとかサッカーとかメジャーなスポーツが結構、件数は多いのですが主要な

ところの合宿の取り組みを行っている自治体のところを見ると、そういう競技がまだあまりないですよ。メジャースポーツを盛んに合宿として取り入れているところというのは。そういうところが結構、狙い目になるのかという気がしてこの資料を見させてもらっていました。町として、そういうところも把握しながら方向性を決めていってほしいというふうにも思いますが、その辺のあたりはいかがでしょうか。

○委員長（吉谷一孝君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 大変、何度も言うようで心苦しいのですが、まだまだこれから積み上げていく段階の部分もありますが、考え方の一つとして小西委員が言われたような考え方もあると十分、理解できますので、そういう観点も持ちつつ、これからの具体的な部分を決めていくにあたって考えていきたいと思います。

○委員長（吉谷一孝君） 私から一つだけ、質問させていただきたいと思います。

先ほど委員のほうからお話があったように課題が明確に示されて、その課題について議会としてどう捉えるかということの議論の展開になるかと思うのですが、私が思うスポーツツーリズムについての課題というのは、まずは施設、競技をする場所、規模それと宿泊等々の規模、そしてあともう一つ言えばツーリズムですから観光客も含めての課題があるというふうに思います。そのことについて行政としてきちんと把握され、今後そのことについて検討されていく予定ということで進めていくという認識でよろしいのかどうか、そこについてお伺いしたいと思います。

工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） まだ町として正式に先ほども申したとおり、経営会議にもまだ諮られていない状況も実はあります。方向性としては、こちらのスポーツツーリズムにもあるように少なからずスポーツだけということではなくて、委員長おっしゃられたように宿泊、観光それから経済的効果ですとか、関係人口、交流人口、そういった部分もいろいろな場面で絡んできますので、また町民の最初のお話に戻りますけれども健康寿命の問題ですとか、そういったさまざまな要素があることでもありますので、本当に関係課が一丸となってどのように具体的な施策を打ち出していかれるかということを今、検討を始めているところでありますので、そういう関係を持ちながら立体的に考え経営会議に諮って具体的に示して、議会の皆さんと議論をさせていただければというふうに考えてございます。

○委員長（吉谷一孝君） わかりました。

その他、ご意見ご質問ございましたらお受けいたしますが、いかがでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○委員長（吉谷一孝君） それでは、担当課の皆さん退出していただいて結構でございます。

今後の委員会の進め方であります。先ほど、大淵委員からも言われたように議論できるような委員会として状況をつくっていきたいと考えておりますが今後、今回は課題の整理ということである課題について検討してきましたが、次回については課題について委員会としてやっていく方法なのですが、委員会だけで進めていくのか、もう一度具体的なものを示された中で議論して報告していくのか、その辺について皆さんにお諮りしたいと思います。ご意見あれば。

高橋事務局長。

○事務局長（高橋裕明君） 総務文教常任委員会の年間予定としてつくってある計画に基づきますと、今回の3月までのスパンではスポーツ振興の現状と課題ということで、課題をまず整理する、課題を明確にすると。4月以降の所管事務調査で例えば団体とか活動についての解決策を探る、もしくは9月からは施設の今後のことについて探る、解決策に入るというような年間計画であったのでけれども、今回はその前段としてスポーツ振興の課題とは何なのだろうということで今、質疑しましたけれども。委員会の中で結局、スポーツ振興の課題はこれとこれとこれだねという抽出ができれば、それを深掘りできるところです、解決策ではなくて、こういう課題があるのだということで整理がされると思うのですけれども。課題を一回、整理しなければならないのと、課題をもう少し明確にするというか深掘りするというか、それが必要であるとするならば、次回はどういう会議をするかということです。

○委員長（吉谷一孝君） 大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） 皆さんはどうかかわからないですけれども。今、老朽化が一番問題になっているわけでしょう、ツーリズム含めて。実態をきちんとわからないと、議論のしようがないのです。だから、少なくとも体育施設と言われる全部でなくてもいいので老朽化しているというのは、どういふうに老朽化していてどうなのかということを議会も押さえると。そのうえで、必要かどうかということの判断をすると、絞り込むものは絞り込むというようなことができるけれども、それをやらないといつもここにきて老朽化しているからできないと言われても、どうにもならないことです。まず、そういうところをきちんと現状把握を我々の側からもすると、そのうえで問題点を明らかにするというふうにしたほうがいいのではないですか。

○委員長（吉谷一孝君） 高橋事務局長。

○事務局長（高橋裕明君） 今の現地を見るというご意見いいと思いますし、行政側からお話は聞いたのですけれども施設を管理している側というのは、そこからも現場施設管理する立場として、こういうところが困っているだとかというのもあり得るかというお話もありました。

○委員長（吉谷一孝君） 私からなのですけれども、大淵委員が言われたように施設的な問題と今回の委員会で多く出てきたのは各種スポーツ団体のこれからの進み方というか方向というか今後の活動状況がとても不明瞭だとか継続していくところが困難だという現状も多く見られていましたので、そういった中でそれについての現状の把握といいますか課題の整理も必要かと感じておりますが、その辺については皆さんどのように考えるか。

○委員長（吉谷一孝君） 氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 委員長言われる部分については今、各常任委員会で分科会活動できるわけですから、そういった団体との分科会活動をとおしながら今の団体さんの課題、そういったものも聞き入れるということは可能なのではないかと思います。

○委員長（吉谷一孝君） ありがとうございます。今後の進め方としては、このようなことで進めてまいりたいと思いますが、いかがでしょうか。そのようなことの進め方でよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（吉谷一孝君） それでは、次回の開催をいつぐらいにしたらいいか。

2月は所管事務調査を行って、調査のまとめを行うということで考えております。皆様の予定等

ありましたら調整したいと思います。

氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 例えば屋外施設、テニスコートだとか陸上競技場だとか、そういったところを見るには雪のある中で見るというよりは雪のない時季にしっかり見ておくべきだと思いますし、プールなどは屋内施設ですからある程度は観れると思うのですけれども。その辺をきちんと考えた中でやられたほうがいいかと思います。

○委員長（吉谷一孝君） 今、氏家委員が言われたように、この時季でもきちんと見れる施設を抽出して見ると。年間計画でありますので外の施設については、見れるような時季を考えながら調整したいと思います。

では、次回開催は2月5日、それと2月17日の午後からまとめということで開催したいと思います。内容につきましては、正副委員長にお任せいただくということでよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（吉谷一孝君） このように進めてまいりたいと思います。

◎閉会の宣告

○委員長（吉谷一孝君） それでは、本日の総務文教常任委員会を閉会いたします。

（午前11時55分）